

ヒナは職場のトイレの個室に入るとはああ、と心底疲れたようにため息をついた。

「疲れていそうだな」

視線を声にした方に向けると空中に蝙蝠の羽を生やした小人がいた。

半年ほど前から一緒に生活をしているソロモン72柱の悪魔のひと柱、グイソンだ。

「うん。また佐藤さんがぎゃあぎゃあ言い出したから気疲れしている」

佐藤とはヒナが補佐役をしている営業担当者のこと。

「あいつか。アレもわがままでどうにもならんからな」

「ねえグイソン、悪いんだけどまた佐藤さんと私の仲を直してもらっていいかな？知っているとと思うけどこっちも佐藤さんと仲良くしていないといろいろ仕事が進まないのよ」

「分かっている。明日には回復するようにしておくから今日1日は我慢してくれ」

「いつもありがとう」

「にしてもヒナ、あの佐藤という男は自ら関係性をぶち壊しにかかっているようなところがあるから私がいくら関係修復をしてもすぐぶち壊しにかかるぞ？」

「・・・やっぱりグイソンもそう思う？」

「ああ。何度かあいつの性格がどうにかならんもんかと思って心を見たことがあるが、あいつは営業先でのストレスをお前にぶちまけているぞ。」

「うん、大体分かっていた」

「分かっていたのなら余計に悪い。担当を変えてもらうなり何かしら対応はできないのか？」

「それがね、私しか佐藤さんのヘルプができる人がいないんだよ」

「なんだと？」

ヒナはグイソンに自分と組むようになる前までは、どんなベテラン事務員でも3か月ともたずに交代になっていたことを説明した。

「それは俺と暮らすようになる前に決まったことか？」

「うん。ガイソンと暮らすようになる1年前かな？あの頃からあんな性格だったよ？」